

海外の海事英語教育事情（その1） —VMU と GMU について—

田中 賢司

1. はじめに

海技大学校では、これまでに国際協力コースの研修生に対し、教育の一環として海事英語教育の研究授業を実施してきている（写真1）が、指導者を含め各国における海事英語の教育事情にかなりの相違が存在する。本論では、英語を母語としない教員による海事英語教育について、教員としての視座からの発表・講演を通じて各国事情を実地に検証し、本学での海事英語教育に活用する。まずは今年の3月から6月にかけて訪問した Vietnam Maritime University と Gdynia Maritime University での講演活動と訪問校からの反応を報告する。



PCG 研修生による研究授業の一例（2015年3月）

2. 海事英語の要諦と海事英語教育の必要性

STCW に定められている海事英語の運用能力は以下の通りである。

Adequate knowledge of the English language to enable the officer to use charts and other nautical publications to understand meteorological information and messages concerning ship's safety and operation, to communicate with other ships and coast stations and perform the officer's duties also with a multilingual crew, including the ability to use and understand the Standard Marine Navigational Vocabulary as replaced by the IMO Standard Marine Communication Phrases.

(STCW Table A II-1)

この能力を船員が維持するという学習課題の根底には、「英語から海事英語に発展させるか、海事英語だけよいか」という各国ないし各校の事情がある。英語以外の母語により授業が実施されている大学や国では、当然海事英語と共に英語を教育する必要がある。今発表では対照実験的に、学内での英語使用が困難でない GMU と、学内でも十分な英語教育そのものを必要とする VMU とを比較した。今後の研究の継続性を考慮し、訪問した時期に従い、VMU を先に GMU を次に述べる。

3. VMU における海事英語教育

VMU はハノイに近いハイフォンにメインキャンパスを有し、今年見学 60 周年を迎えた学生数 2 万人以上の総合大学である。英語教育においては、外国語学部を有し、航海学部、機関学部に言語的に支援する態勢が整えられている。学外には TOEIC と IELTS を専門に教える英語塾も数多くあり、学習教材も豊富に販売されている。

本論者は当該大学の建学記念式典に先立ち、英語教員及び航海及び機関、そして外国語学部の学生に対し、計 8 時間の講演及び講義を実施してきた。海技大学校の国際協力コースを修了した現副学長より、今後の協力継続を依頼されている。



VMU における海事英語に関する講演（2016年3月）

4. GMU における海事英語教育

海事英語教育を専門的に実施している GMU においては、グディニアに三つのキャンパスを有するバルト海屈指の海洋大学である。英語教員との研究交流を実施した。2 時間にわたる海技大における海事英語教育についての研究発表の後に、当大学の教育事情を情報として得た上で、教材をはじめとする今後の研究交流を約束されている。



GMU における英語教員と共に（2016年6月）

おわりに

両大学における関する講演は、内容を統合の上、2016年6月にマリア・キュリー・スクロドフスカ大学にて開催された国際学会において三度目の発表を行った。年内にその発展形を国内学会でも発表する予定である。詳しくは発表において紹介したい。